

高山智津子

女教師

愛ひとすじに

改訂新版

あゆみ出版



山智津子

女教師

愛ひとすじに

改訂新版

あめみ出版

高山智津子（たかやま ちづこ）

1930年、大阪に生まれる。兵庫師範学校本科在学中に教師となる。1948年9月から1981年3月まで兵庫県下の公立小学校に勤務。

現在は、大阪保育・学童保育専門学校講師。

サークル：兵庫文学教育の会代表。新日本婦人の会兵庫県本部代表委員。日本子どもの本研究会会員。

著 書：『この本に夢中』神戸新聞出版センター
『子どもの内に潜むもの』清風堂書店出版部

現住所：〒554 大阪市此花区伝法5-9-3

女教師 愛ひとすじに

1982年10月20日	第1刷発行	（定価はカバーに 表示してあります）
1987年7月20日	改訂新版第1刷発行	
1987年12月20日	改訂新版第2刷発行	
著者	高山智津子 ©	
発行所	株式会社 あゆみ出版	
	〒112 東京都文京区春日2-17-3	
	電話 03 (815) 5511（代表・営業）	
	03 (815) 5471（編集）	
	振替 東京 8-10590	
印刷所	光陽印刷株式会社	
製本所	牧製本株式会社	

落丁・乱丁の際はお取りかえします。

ISBN4-7519-2179-7

第一章

先生になりたい 11

先生になれるでしょうか 11 セーラー服で 14

戦後教育史 19 やさしい先生になりたい 20 朝

の祈りの時に 23 木瓜の花 26

祈りと信仰への疑問 30

キリストは哲学者か 30 パケツリレー 36

百八十度転回の日々を 41

夾竹桃は咲いたけれど 41 桜並木 44 渡り廊下

の藤の花 48 アルバイト 54

学費を求めて 58

武庫川の風 58

ユーウツ 63

一冊の本 65

第二章

無力な新米教師 71

ちり紙をそつと 71 はじめての授業 74 ドッジ

ボール大会 79 窓吹く風 83 健ちゃんのお母さ

ん 86 暗い夜道 89

初恋・失恋 94

藤色のスーツ 94 子どもの絵 98 本時の目標は

102 彼なりしかば心おどりぬ 105 若きウエルテル

の悩みと共に 111 映画サークル 116 戦争反対 121

働きながら学ぶ人々とともに 123

負けないぞ！ 123 山のあなたに 128 テキスト一

冊め 130 レポート 132 スクーリング 135 翳かげ

りある青年 140

祝福されない結婚 144

芹のみどりをさがしぬ 144 さくらんぼ 147 君が

ためにこれほどまでに 153

第三章

『女大学』を知らない嫁 161

手鍋下げても 161 青い小鉢 164

二万三千円の心の支え 169

デュルタイやカントの理論に関わらず 169 春暖かき

日 173 赤い手帳 175 灯ともし頃 179

胸の震え 183

赤ちゃんは困ります 183 母親大会 187 婦人部副

部長 193 菜の花の黄色 195 三つになるまで 199

決心したい、決心できない 203

灯りをつけて 203 矢部先生 206 埋没 209 冬

が来た 211 六月 雨の日のあじさい 213 カレン

ダー 216 野菊の花びら 218 家出 221 秋の雨

224 涯なる岬 226 コスモスの花 230 きつぱり

と 232 妙ちゃん 234 杜若のむらさき 237

第四章

五月晴れの明るい日 243

ひょうたん池 243 あかね 246 花柄の布団 247

あかね班 249 子どもの名譽のために 253

新しい出発 255

ひとつだけ信じたい 255 花を買い来てケーキを切り

ぬ 257 ガスタンク 260 ちひよう 265

めくるめく日 269

オルグ 269 橘公園の雑木林 274 ひとりばつちの

息子 280 流れる汗 282 ボク、困るのです 284

参観日―五千円― 290 母親運動 292

人生を変えた日 294

テストのめあては? 294 タッチ交替 297 教育実

習生 300 二〇・二二スト前夜 303 その日、二〇・二

一スト、仲間 306 一枚の名刺 310 電話 316

『まるまるまるちゃん』 317

第五章

憂うつをのりこえて 323

秋の空は高いのに 323 煉瓦造りの医院 325 りん

どうの花 328 紅いスーツ 331 なんにもようせん

のに 335 考えさして 337 条件 340 再婚 342

お祝いの会 344

働き続けるために 348

電車の中 348 雨に打たれし母 352 洗濯もの 355

高座の滝 360 戦慄 364

サークル結成 368

いっすんぼうし 368 三保の松原 372 授業が見え

ない 374 一回で人間は変わらない 378 家事と育

児で研究が中断 384

第六章

重くてきびしくて誇りあるもの 389

桜の花びらの下 389 テープの校長先生 391 産休

のこと 395 若い先生に学ぶ 398 新校長着任 399

かなわなかった条件 402 生きがいの分科会 404

集団の感動の響き合い 407 友ちゃん 409 ひょう

たん池の子ら 411 三組の親子連れ 413

檻樓くらんるの旗と教育者 418

お酒の匂い 418 うらやましい先生の仕事 421 許

せない 424 葉桜 425 平和荘 428 一枚とびら

のふすま 430 洗濯 433 檻樓くらんるの旗を掲げて 436

白い体操服 439 合宿の夜 441 さわやかな夏 444

洩垂はなれ小僧 447 転入生 448 祭りのたいこ 450

卒業式 453

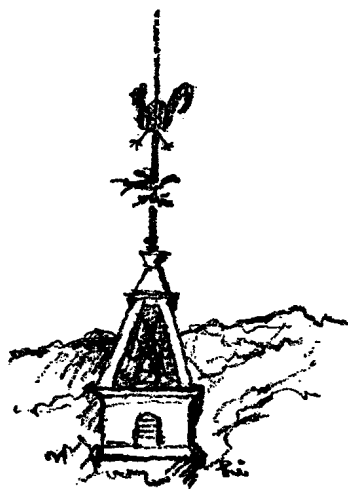
中庭の桜 453 卒業式の歌 454 さようなら 458

吾れなすことは果てしもあらず 460

あ
と
が
き

本
文
中
カ
ット
／
小
松
乙
彦

第一章



先生になりたい

大洋の水貝がらで掬うごと吾なすことは果てしもあらず

先生になれるでしょうか

一九四八年（昭和二十三年）九月のはじめごろだった。九月に入っただけとはいえず暑い日だった。先生になれるかどうかをたずねるため私はひとりで尼崎の市役所へ向かった。その時私はまだ十八歳の誕生日も迎えていなかった。しかも師範学校の本科一年生になったばかりだった。今から思えば十七歳で人を教えたなど、なんと厚かましいことだろうと思うが、その時の私は早く先生になりたいというせば詰まった気持ちばかりで、自分が厚かましいことを考えているというなど思ってもみなかった。

第一章

それでも、市役所の門を入ると、足がふるえ心臓が止まるかと思うほどドキドキする。立ち止まって大きく深呼吸をした。しばらく目をつむった。（だめでもともと、何でもたずねてみかけ

れば判らない。先生になれるかどうかたずねるだけ……）ひるみそうになる私にもう一人の私がけしかける。

夾竹桃の濃いみどりの葉に太陽がぎらぎら照りつけている。背中があつい。太陽に押されるようにして市役所の古い建物の中へ足を踏み入れた。廊下は暗くて冷やっとしていて。学務課と書いた部屋の前に立った。また、胸がドクンドクンとふるえる。

「さあいよいよ乗り込むんだぞ、がんばれ」自分を励ますように大きく息を吸いこんだ。

（師範学校本科一年在学中ですが、今すぐ小学校の先生になれるでしょうか）幾度も練習してきた言葉を小さい声で言ってみた。言えるだろうか、怖い係の人だったかどうか、むつかしいこと聞かれたら何と答えよう。卒業していいんだめと突き離れたらどうしよう……。心配していたことが、次々と頭の中を駆け回る。それを払いのけるように頭をおるんぶるんと振ってからまた深く息を吸いこんだ。そして、思い切って入り口の戸を開けた。

「失礼します」小さい声で言って部屋へ入ったけれど誰もこちらを向いてくれず、知らん顔して机に向かって仕事をしている。入り口付近の机には年配の男の人が何か書類に書き込みをしている。

私は恐る恐るその人の前まで行って、

「アノー 師範学校在学中ですが……」

第一章



と言った。何回も練習してきたかいがあり、つかえずに言えた。そのことに自信を得て、背筋をしゃんと伸ばし、まっすぐ係の人の顔を見た。年配の男の人はものうげに顔をあげて私を見た。私は黙って頭を下げた。

「あんた、今どこに住んでるのや？」

私はこの質問を聞いて、私がさっき言っていた（師範在学中ですが……）をこの人は聞いていたのだとほっとした。この安心が少しだけ私の心を落ち着かせてくれた。

「ハイ、大西です」

男の人は、今度はこともなげに、

「ウン大西か、そんなら、立花小学校へ行つて、校長先生に会うといで」

ポカンとしている私に、その人は、立花小学校知ってるやろ、早く行きなさいとばかり

に次の仕事をはじめのか書類をめくりはじめた。私は挨拶もせず外へとび出した。

（すぐに、立花小学校へ行きなさいということはどういうことやる。先生になれるのかな、いや、そんなことはない、校長先生が面接試験をしはるのかな。いや、ひよっとしたら立花小学校で教育実習させてくれはるのかな）

何が何だか判らないけれど、とにかく立花小学校へ行ってみようと、自転車を走らせる。市役所の門のあたりの葉鶏頭の紅があざやかに目にしみる。

セーラー服で

暑い、暑い。汗が髪の毛の中から流れてくる。ハンドルを握る手にも汗をねばっこく感じる。ペダルをぐいぐいと踏んだ。風が上気した頬に快い。何かいいことがありそうな気がしてくる。

立花小学校は、大西より北東にあつて、校舎のまわりに田んぼがある。敷地の広い大きな学校だ。私の弟たちも三人在学している。市役所から阪神電車の踏み切りを越え、国鉄の踏み切りも越えて三十分も走ると木造校舎が見えてきた。校舎が見えてくるとなぜか心がふくらむ。広い運動場でドッジボールをしているにぎやかな子どもの声が聞こえる。私は自転車を止めて、しばらく見ていた。